

I 読まれ方

- (1) 強靱な生命力。1987年、2002年、2019年と版を改めて、読まれ続けてきた。
- (2) 1988年のウォリック大学社会史研究センターの雰囲気
知っているが、位置付けに戸惑い。①トムスンやホブズボームを継承している面と修正・否定している面をどのように統一的に理解するか。②当時の関心の時代を遡行して、③労働者ではなくて、中産階級の形成史に注目したことをどう受け留めるか。
- (3) ジェントルマン資本主義論との関係：順接？ 否定？ 擦れ違い？
- (4) デフォウ以来の「中産階級史観」：社会の礎・魁としての中産階級
- (5) フェミニスト史学が「一部」を描くのではなく、都市的な中産階級の生成を宗教、経済・経営、学校・慈善・諸種の団体など公共空間、家族、文化、習俗などの「全体」として描く。

II 特徴

- (1) 福音主義に注目して、ジェンダー化された階級形成を論ずるという方法的戦略。
 - ①「福音主義」「ジェンダー化」「階級形成」をほかの何かに置き換えうる応用可能性
 - ②「福音主義」と、20世紀(後半以降)の「普遍主義(universalism)」(ネオ・リベラリズムの表向きの規範「無差別・一律・平等」との同型性：原理的な一律平等と現実解釈としての差異・区別(⇒差別)の矛盾した併存⇌差異を超えたまた差異の中の連帯を阻む思想。「男性によって代表される女性」、女性を「家庭」という領域に封じ込めようとする理屈、「企業によって代表される従業員」、労働者を私的領域に封じ込めようとする理屈。
Cf. 第一のグローバル経済における「個別主義(particularism)」的な原理的区別を前提にしたうえでの多彩な連帯：地方的・全国的・国際的カルテルを可能にする思想＝第一次世界大戦前の社会主義・労働運動の哲学的基盤⇒ILOによる篡奪、GUFsの無力な現状。個別主義的な連帯は、決して福音主義的な差異・区別の結果・継承者とはいえない。

☞http://www.onozukat.e.u-tokyo.ac.jp/Onozuka_JASPS_20180915.pdf

- (2) 私的空間と公的空間が相互浸透するジェンダーの見える歴史
従来は、人も性もない公共(政治・市場)の歴史と、経営史・家族史・女性史の分離共存。経済史→経営史→家族史という変化の必然性。
有限責任制と主従法改正と「家族保護」との関連性(145頁)の指摘は秀逸。1844～62年の会社法の一連の改正に説き及んだならなお素晴らしい。
⇒「純然たる公共空間などありはしない」から、公共空間についての従来解釈(政治史・経済史)の公然たる描き直しはされない。another storyという共存戦略？ 方法的弱点？
- (3) 家庭の可視化の試み
第Ⅲ部「日常生活」だけでなく、第Ⅰ部「宗教とイデオロギー」、第Ⅱ部「経済構造と経済機会」も含めた本書全体が、家庭(family)の描かれなかった部分を暴き出す試み。
- (4) 矛盾に満ちた現実の体系としての家族・男・女
無矛盾の理念型には、ヘーゲルの弁証法でも用いなければ変化の契機は説明できないが、本書の採用する方法は、端から矛盾に満ちた現実として対象を描く。
⇒変化の契機は遍在しているのか、それとも、特定の状況に対応して矛盾のどこかが綻

びるのか？ たとえば、19世紀後半以降の女性参政権運動の出現をどう説明するか？

Ⅲ 気になった点

(1) 構造主義的な循環論法

Ⅱ(4)にも関わるが、「矛盾に満ちた現実の体系」は、構造主義的な循環論法になっていて、出口が発見しがたいのではないかという印象。

「敵役・悪人」を名指ししない叙述と、「普遍主義」(实在論)的認識との同型性
女性の自己放棄の個人主義性(58頁)、「封じ込め」とその主体(135頁)

(2) 欠落

本書は、都市的な中産階級の公私を跨がったジェンダー的な生成過程についての百科全書的な記述をする(原著はより百科全書的である)が、欠落もある。

① 性愛

② 同性愛

③ 婚外恋愛・婚外性交 Cf. 「カロリーネ王妃事件」の中産階級版

④ 子ども・廃疾者・貧者の視点

⇒すべて示唆はするが、立ち入らない。史料の不在？ 著者たちの取捨選択の結果？

そのものを語る史料はなくても、18世紀以降の英語圏なら相当量の文書をデジタル検索できるから、①～④に関する記録の「不在」から、何かを論じうる可能性はある。

⑤ 「核家族」

(3) 再構成できていないことから

i 農業会計(農業の資本主義化、145頁)：地主・農場経営者・農業労働者の三分割制

ii 農閑期の祭りの消滅(195-196頁)「収穫の夕食」の伝統のゆっくりとした変化、1846年「私は彼らに食べ物や打ち上げは一切約束しなかった」。

iii 暖房用に特化した暖炉の普及と大陸的な「台所用竈」の不在→暖房と料理の分離(290)

iv 食の変化(293-294頁)。「18世紀末に、主な飲み物はビールや弱いエールから茶に変わった」、「銀行や商家や工場のなかにも、正式な宴会用の調理設備のある部屋がそなわったものがあった」、「夏の戸外の「家の芝」の上で料理をし、調理の行われる火を全員で囲んで座り、夕暮れどきを過ごす18世紀の農村の慣行からは一変した」、「調理作業はいまや台所のなかへと追いやられた」。

v 「午後の茶会はしだいに女性向けの軽食の場となった」(307頁)。

vi 飲酒・喫煙・世俗的「猥雑」な話題からの女性の排除、さらに、中間層における飲酒が1840年代までに際立って減少した」(307頁)。

① 農村と祭りの消滅←共有地入会権の消滅←囲い込み

② Falstaffianな老若男女混在の猥雑な飲食(+歌舞音曲+異性との接触・諸種の性愛)の場から、男女別のお行儀のよい飲食への変化。

③ 正餐(dinner)の衰退・記号化・文化的植民地化と、ティーの高度な洗練の同時進行。

④ 都市的な中産階級の女性の「軽い飲食」が、イギリス近代を特徴づける食のあり方。

⑤ そこで、女性たちが果たした家族戦略・結婚戦略・経営戦略上の役割。

☞ 拙稿「イギリス料理はなぜまずいのか？」井野瀬久美恵編『イギリス文化史』昭和堂、2010年。

⇒ 伝統的(カトリック・国教的)なイングランドの飲食歌舞音曲性交の文化の衰退と、イングランド料理の消滅と、ティーの出現という文化史上の大変化がなぜ、主題化されて描かれなかったのか？